第九章　弘前と藤田謙一

1、藤田育英社

藤田謙一の生涯のもっとも偉大な仕事はこの育英事業であるともいわれる。このことは玉虫文一、原為徳、時子山常三郎ら社生の手記に明らかであり、また別の角度からでも柘山寿郎の回想で明らかである。そしてその極まりは母校東奥義塾に枯木平の藤田農場とこの藤田育英社の資金を寄贈したことであろう。

藤田謙一がその育英事業を機関事業として内容、形式を整備したのは大正七年であるが私的には明治年間より行っていた。「藤園」創刊号の藤田育英社沿革概要によると、もっとも早い奨学生は古内尚雄で明治二九年四月から大正一〇年三月までの十六年間にわたっている。彼は大正一〇年に東北帝国大学工業専門部を卒業した。二番目は甥の明石準一郎で明治四一年四月から大正六年三月までの十年間で、終りは高千穂高等商業学校だった。他に七名あり、東大教授の玉虫文一もその中の一人である。この頃は学生を邸内か通学上便宜の地に住まわせ、所要一切の学費を給与した。

大正七年一月、学生の収容数が増加したので東京市麹町区有楽町二ノ七番地所在の家屋を学生寄宿舎として藤田謙一事務所の直轄とした。そして資金二十五万円で十二月一日藤田育英社の創立となった。資金は大正九年、百万円に増資された。大正七年十一月二十九日、麹町区有楽町二番地の藤田事務所に於て藤田育英社は創立総会を開いたが、その席で藤田謙一は次の趣旨をのべた。

「一国文明の健全なる発達を期する上に於て人材の養成の必要なるは勿論の事なるが、また一方に於て有為の英才を抱ける青年をして其志を得せしめずして空しくこれを江湖に朽ちしむる事は国家の一大損失たると共に私情に於てまたまことに忍びざるところなれば、余は従来これら有為の青年を見るごとに多忙の間、その才を鑑別する暇なく学資給付をなし来りしが、かくてはその効果の甚だ乏しきを思いやがては統一ある組織の下に人材養成の素志を達成せんと企画する折柄、欧州大戦は漸く終局の幕を閉じ新なる平和の曙光は今や全世界を光被せんとするに際し、突如我が育英社創立の計画を発表するに至れるは即ち永遠の平和を記念する意味に於て本社の歴史を飾る所以なりと信ずればなり」と。

役員は社長兼社主が藤田謙一、理事に根岸耕一と宇佐美薫次、監事が赤尾藤吉郎、社生（奨学生）は九名で在籍学校は中央大学2、早稲田大学1、電機学校1、中央商業1、開成中学1、物理学校1、米国留学1、東北帝大1だった。

大正八年六月、育英社本館（建坪一三七坪）、舎監住宅（二十五坪）が東京市外平塚村字下蛇窪五七五に完成し、学生全部が移った。理事の根岸はイギリス、アメリカに三ヶ年間留学することになり、彫刻研究生石戸谷剛も入社した。彼は翌九年八月、日本美術院展に入選した。作品名は「黎明」である。その年の社生は十七名で在籍学校は東京帝大1、東北帝大1、中央大2、早稲田大1、慶応大1、法政大1、中央商業1、電機学校1、物理学校1、彫刻研究1、商船1、日本中学1、開成中学1、清国留学1、米国留学2。

なお二階建本館と舎監住宅は実は前年の大正七年十二月、市外平塚村五七五番地藤田邸内の東北隅・高燥の地に建設されたものだが、ここの三百坪の地面では社生の運動に狭いとして、立姿のまゝ、七十間（約三十メートル）移動させて六百余坪の地に移動させた。七十間の間には小川、用水路あり、土地の高低あり、家屋の壮大さなどで何人も驚異の目で見たが藤田社長は莞爾として工事の完成を待ち、さらに各種の運動器具も完備させた。また地域住民にも開放する公衆運動場を隣接地に建設し、十月三十日開場式を行った。一千余坪の広さで四面四十間に柵をめぐらし、三百メートルのトラック、中央には土俵、樹木植えこみの中にテニスコート、そしてベンチ、水道まで設備した。

大正九年十二月、藤田育英社規則を改正し弘前支社社生採用規定を設けた。東京が本社である。また科学研究や発明に対しても奨励金を出すことになった。なお藤田育英社の奨学金は返還の義務がなく、また卒業後の拘束もなかった。弘前支社の推薦は青森県人に限られているが、本社の場合は出身地に関係なかった。大正十四年七月末の奨学生の状況は次の通りである。

出身者学歴表

	本社	支社	合計
学位を受けたもの	1	0	1
帝国大学を卒えたもの	6	0	6
私立大学 〃	〃 6	0	6
高等又は専門校 〃	〃 8	3	11

中等学校を〃	9	2	11
その他	3	0	3
合計	33	5	38

現在生学歴表

	本社	支社	台計
大学院にあるもの	1	0	1
帝国大学にあるもの	4	0	4
私立大学にあるもの	1	0	1
高等又は専門校に〃	0	1	1
中等学校に〃	0	7	7
その他	0	0	0
合計	6	8	14

なお弘前出身で藤田育英社の世話になった人物に、前記の他に、会社重役の川崎邦夫、著名開業医の斎藤義雄、仙台二中校長館山一、群馬県住宅供給公社理事長斎藤武博、大阪府の四条畷学園理事長小田切潔、日大教授横岡雅雄、八高校長・県教育次長小山敏夫などがいる。

藤田先生と育英事業

柘山寿郎
（元秦野商工会議所会頭）

藤田先生は平素秀才教育を強調し、之を実行している人である。現在の画一主義の教育制度は秀才も凡庸も亦低能も悉く一定の鑄型にはめこんで各人天賦の性能を遺憾なく発揮せしむべき機会を抑制してしまうのだ。之は文物発達の上に非常な損失である。故に秀才凡庸又は低能者は、各其性能に応じて別個に之を教育し、其長は益々之を助け、其短は能く之を補って其天賦の長所を発揮せしむべき事を高調して居るのだ。

現下の動揺せる国民思想を善導し、堅実なる発達を遂げしむると同時に、政界財界は勿論百般の世相悉く偉人の出現によって之を導くに非ずんば、凡庸の輩徒は天下に充満して終には船頭多くして船山に上るの外なく、動もすれば国家の途を危くするの虞れがある。

故に氏は将来社会の中堅となり、一世を指導すべき人物を養成したいという望みから、夙に自ら其主義を実行し、東京及び弘前に育英社を設け、貧困にして学資なき秀才を以て収容して学資一切の物資を給与し、専心勉学の途を啓き、其成業を期せしめて居る。

而かも学資を給するに付き、何らの条件を附せず、将来其の全然無条件にて単に社生の成業のみを楽しんでいるのだ。此の点世に在りふれた此種育英事業と全く其撰を異にする所で、之でこそ真に秀

才教育が出来るのだ。

現に先生の世話を受け育英社を出て今日社会に立って活動しつつある人の中には、商工省勤務の某技師もあれば、孜々として病理学を研究しつつある医学博士もあり、応用化学科の天才と謳わるゝ某高等学校教授もあれば数年来、院展に引続き入選の新進彫刻家もいる。又実業界に於て漸く世間から矚目せらるゝ様になった新進の某氏もある。先生は右の如く将来の人物養成に力を注ぐと同時に幾多の公私団体を自ら主宰したり又は後援して社会的にその力を尽している。（大正十四年）

藤田先生についての個人的回想

玉　虫　文　一
（理学博士・元東大教授）

藤田謙一先生と初めて御眼にかかったのは、明治四十年五月、私が小学校三年に進級したばかりの時であった。京城の日韓印刷株式会社で先生の下で勤務していた私の父が急死し、遺された母がその後の生活をどうすればよいかについて、藤田先生の御指導を受けるために、麹町の御邸宅に伺った際に一緒に連れられて行ったのである。その時の先生についての印象は憶い出すことができないが、他に全く寄る辺もなく茫然としていた母が初めて先生にお会いして、どれほどその御懇情に感激し、励げまされたかは幼少の私にも十分に感じとることができた。その頃の先生はまだ三十代の青年実業家であったが、その実力と活動ぶりは内外に知られていた。

先生は私の家の窮状を察せられ、私の異母兄（古内尚雄、昭和十八年死亡）が築地の工手学校に入学すると同時に藤田家の書生として住み込むように配慮せられた。この兄は仙台の高等工業学校に入学するまで、また卒業後も暫くの間、先生のおそばに在って一方ならぬ世話になった。私は東京・原宿の小学校を出て、果して学業を続けられるかどうかの見通しもなかったが、偶々東京府立一中（日比谷高校の前身）を受験し合格した。そのことを藤田先生に御報告したところ、大へんおよろこびになり、学費の補助をしてやるから学業を続けよとの懇切なお言葉をいただいた。もし先生のお言葉がなかったならば、私の生涯は今とは異なった道を歩まねばならなかったであろう。その後私は毎月一回、藤田邸に伺うようになり、更に一時は母と共に同邸に住み込んで御世話になった。当時のことで忘れがたい憶い出の一、二を記させていただく。先生は殆んど毎日、夜十二時近くに帰宅された。御帰宅の際は自動車の運転手が合図のブザーを鳴らすので、書生たちは玄関にかけつけて扉を開き、先生を御出迎えする習わしであった。ある夜偶々私が一人当番であったが、ついうたたねをしていたところにお帰りになった。気がついてあわてて玄関に走り出たところ、その時すでに先生は御自身で扉を開けられ、お入りになっていた。急いで走って行った私は目先きがくらんで先生のお腰のあたりに体当りしたのである。すると先生は中学生の私の頭をおなでになって「よし、よし」と言われた。何という優しいお心であったろうかと今さらに感激した。このような情深い方であられた反面、先生は非常に厳しいお方であった。お帰宅になった時は御不在中の電話、来客などの用件について御報告をするのが任務であったが、その報告の不確かな点については必ず反問される。それに対して「…だと

思います」というような御返事をすると、「思いますでは分らない。もっとはっきりと確めておかねばならぬ」と仰せられた。時には先生のはげしいお叱りの声が発せられた。

先生は私の学業成績がよかったことをおよろこびになり、常に励ましの御言葉を下された。一中を卒業後の方針について御相談申上げたところ、おまえは実務よりは学問に向いているようだから自分の好む道をえらぶがよいと仰せられたので、第一高等学校（旧制）第二部（理科）に受験する決意をした。当時私は体重が十貫そこそこの貧弱な体格であったが、激烈な試験に合格の幸運をえた。この時の先生の御満足は殊の外で、私のことを恰かもわが子のことのように吹聴せられた。それは大正五年であったが、おそらくその頃に先生は育英事業をさらに計画的にお進めになる決意をされたのではないかと推察する。

一高在学中も、またその後の東大在学中も学費を頂くことができたので、私は今日の学生のいわゆるアルバイトをする必要もなく、学業に専心することができた。学士試験合格の卒業証書を持参した時、先生はほうびとして何か欲しいものをやろうと言われ、私は当時ようやく輸入品として普及しはじめた携帯用タイプライターを買って頂いた。それは私はドイツ留学時代から学位論文を書く頃まで使用したのである。大学卒業後、私は理化学研究所助手に任用され、さらには旧制武蔵高等学校教授となった。大正十五年秋、ドイツへの留学が決まった時、先生はわざわざ私を麻布狸穴の後藤新平伯邸にお連れ下さり、御紹介下さった。同伯からは留学についての御助言と共に有名なドイツの化学者ハーバー博士（一九一八年度ノーベル賞受賞者）宛の紹介状を頂くことができた。藤田先生と後藤伯

との親交についてはかねてから聴いていたが、このお二人の巨人の會談の席につらなることができたのは私の生涯の憶い出である。

昭和三年初夏、当時東京商工会議所会頭の職に在られた藤田先生はジュネーブで開かれる第十一回国際労働会議にわが国の使用者代表として出席されるために、シベリヤ経由で渡欧され、その途上ベルリンに立ち寄られた。ちょうどその時同地に留学中であった私は先生をホテルにお訪ねして親しく御話をうかがい、また自分の近況を報告することができた。先生は非常にお元気で抱負に充ちておられた。ジュネーブ会議で先生が演説されているお姿の写真は私のところに遺されている唯一の記念品である。

このような明るい希望の時代が過ぎて、昭和十年代には世相も次第に騒がしくなるにつれて藤田先生の社会的立場は益々重いものとなり、御身辺もいっそう多事となった。私自身も一人前の研究者・教育者としての仕事に明けくれるようになり、先生と御眼にかゝる機会も少なくなった。年の初めなどに大井町の御邸に伺って先生とお家族にお会いしたり、育英会の会合の折に出席して先生のお話をうかがう程度であった。さらに戦争の末期の頃には、あの精力的な先生の御身体にもお疲れがうかがわれるようになった。そのような時に私自身はまた身辺の雑事に忙殺され、先生をお訪ねしてさまざまな御心痛の問題についていくらかでもお慰め申上げることができなかったことは、今更ながら後悔される。先生の晩年の御心境を想うとまことに胸が痛む。

藤田先生は私にとっては真に生涯の大恩人である。幼くして父を失った私は、もし先生の御愛顧と

御援助を受けなかったならば、とうてい現在の立場にいたることができなかったのである。しかし、このような私も先生にとっては多数の中の一例にすぎなかったであろう。先生は実に多数の志をもちながら恵まれない境遇の青年に対して愛情と激励をもって援助の手をさしのべたのである。

実業家、経世家として藤田先生が成し遂げられた偉大な事業については私もひそかに見聞しているが、それについては他に多くの方々が述べられるに違いない。さきにも記したように、先生は厳格の中に温情をこめた人格者であり、また私情をこえて公共の為に骨身を惜しまれぬ人柄であった。まれに見る清廉潔白な方であり、権力や財力を私的目的に使うことを極度に慎まれる方であった。そのような御性格については私のように幼少の頃から先生に接触していた者が却ってその真相を知りえたかも知れない。先生はまた極めて視野の広い国際人であった。同時に日本人としては特に東北人としての気迫と誇りをもっておられた。そして心から郷土の風物を好まれ、郷土の人々を大切に扱われた。津軽富士を背景にして藤田農場に立たれた先生の御姿こそは、われわれにとってもっとも親しみぶかく、忘れがたい記念像ではないだろうか。

以上の拙文は藤田謙一先生の偉大な業績や人格を語るには、あまりに個人的なものであり、不備なものであるが、筆者としては先生から与えられるた高恩に対する感謝のしるしとして綴ったものであり、先生の人格の一端に触れることができれば幸と思う次第である。

藤田先生を偲ぶ

原　為徳
（元明治大学教授・現和光大学教授）

㈠

我が育英社の恩師であり我々社生の育ての親である藤田先生は、七十有五年の生涯を最後に今や幽明境を異にされたのであります、

顧りみまするに、藤田先生の生涯は奮闘に次ぐ奮闘の生涯でありました。病の床に就かれていよいよ活動が不可能になる最後の瞬間まで、人生の戦いを戦い続けてこられた我が祖国財界における一闘士の生涯でありました。

私は今次日米戦争の勃発を契機といたしまして十七ヶ年の在米生活を打切って、再び内地の人となりました者で、東京における藤田育英社の第一期生の一人でありますが、帰国後藤田先生に久し振りでお目にかかりました時に、最初に受けました感じは先生が非常にお年をめされたということでありました。同時にまた私が非常に嬉しくそして懐しく感じましたことは、藤田先生が十七年以前にお別れした頃と少しも変わらない大きな声で、唾をプツプツととばしながら若い者を叱り飛ばしておられる昔のままの藤田先生であったことであります。「これはたまらない、我々青二才は先生に敗けてはいられない」という何かしら引締められるモノを身に感じたのであります。しかしながら我々は今や藤

田先生のあの大声もプップツという唾の音もあの叱り飛ばしの声も再び聞けなくなりました。我々があの引締められる何モノかを感じられなくなったことは洵に淋しいことであります。

藤田先生は内地はもとより遠く欧州にあるいは支那大陸にあるいは満蒙の曠野に大きな足跡をのこされました。先生は色々の事業を起されあるいは盛り上げて、過ぐる日の我が国財界に寄与するところ洵に甚大なるものがありました。しかしながら先生のなさった最も大きな事業は育英事業すなわち我が育英社であったと申すことが出来ると私は思うのであります。

私は帰国後最初に先生にお目にかかったときに「先生育英社はどうなっておりますか」とお尋ねしました。「うん育英社は森ヶ崎という所で続けてやっている。あれが一番大切だからなあ」と先生が言われたことを思い出すのであります。

私は在外生活中常に思ったことでありますが、もし日本の女性が諸外国の女性に比較してどの点が一番すぐれているかと聞かれたならば、私はたちどころに「それは日本の女性が最もよき母である点にある」と答えるのに吝かでない者であります。「若き者をこの世に送り出す」こと程偉大なまたうるわしいことはありません。またこれ程有意義な事業はない」と私は思います。

私は若い頃母国を出ましたので、藤田先生の思想とか、また人と成りを此判的に観察するなどということはありませんでしたが、このたび帰国後色々な人から先生に関する此判を聞かされたのであります。或る者は先生を非常に徳とたたえまた或る者は苛酷な批評をしました。藤田先生はかつてご自身で書かれた「世界平和への道」というご本を私に下さいました。そのなかに「人間は成功しようと

思えば非常に高いところか、または非常に低いところを狙え、決して中間を行くな」という意味のことを教えておられますが、この言葉は或る意味において藤田先生の処世法のモットーであったと同時に、また先生の人格の両面を言い表わしたのではないかと思います。すなわち先生がひとたびビジネスの戦場に矛を持って立ったとき、先生は苛酷なまでに敵を殲滅せねば止まぬという火の玉のような闘士であった反面、先生が情の国に逍遙されたとき、それはあたかも陽の神ジーアスが美わしの池に遊ぶリーダーに向かって下って来たスワンの姿にも似たものであったに違いないと思うのであります。

まことに「大木は風に怨まれる」とか申しますが、藤田先生に対するこれらの酷評は、先生を徳とする総べての讃辞とともに、また必ずしもその全部が間違っていたと言い得ないと思います。すなわち人間藤田はあらゆる善き面とともにまた苛酷な半面もあったことと思います。

しかしながら、もし我々が藤田先生の一生涯のバランスシートを作るならば、この育英社のお仕事は他の総べての赤字を相殺し、なおかつ黒字として厳然として残るであろうと思います。またもし藤田先生の生涯の物語が筆に採られたならば、この育英社の物語りこそ他の総べての物語りを蓋い、かつ燦然と輝やくでありましょう。

今や藤田謙一という偉大な大木は倒れました。しかしこの倒れた大木の下には無数の蘖(ヒコバエ)が青々と新芽を出しているのであります。我が国は今や有史以来の一大難局面に遭遇しているのであります。我々藤田大木の蘖はこの一大難局という悪天候と戦いながら、あの藤田先生の大声と、あのプツプツという唾とあの叱り飛ばす元気と、そしてあの引き締められる何モノかを身近かに感じなが

ら、戦いの第一線に立って敢闘しているのであります。矛をもってする戦いは一と先づ終りを告げました。しかしながら真の戦いすなわち平和の戦いはもう始まっております。

藤田先生の霊よ、安らかに眠り給え！我々育英社の一同は先生の遺された大きな足跡に礎となって生え、そして奮闘しているのであります。また先生のごとくよき闘士として奮闘を続けんとする者であります。

ここに僭越ながら藤田育英社一同を代表いたしまして一言地下の先生の霊に対しいささか我々の素志を申し述べる次第であります。

―――◇―――◇―――◇―――

藤田先生の葬儀は築地の本願寺でしめやかに執り行われた。終戦後間もない頃のことでもあったためか、會葬者の数も余り多くはなかった。私はその前夜に書いたこの弔文を涙の声で読んだ。謙次さんの出された會葬者に対する黒枠の端書には左のように印刷されていた。

亡父謙一葬儀の節は雪中にも不拘遠路御會葬を忝ふし
且又御鄭重なる御芳志を賜り候段誠に難有深謝申上候
後日拝眉御禮可申述候も先は不取敢乍略儀以寸楮御挨
拶申上度如斯御座候

昭和弐拾壹年四月

嗣子　藤田謙次
藤田謙行
藤田謙友
（出征中）藤田謙介
藤田謙五
外親族一同

（二）

葬儀のあと、私はなにか失神したような気分で、ただ的もなく夢遊病者のようにふらふらと歩いた。本願寺から歌舞伎座の前を通って銀座に出ると、自然に数寄屋橋の方に足が向いていた。そこの朝日新聞社の裏側の新聞紙の発送車が発着する場所に立ってぼんやりしていたためか、トラックの運転手たちがやたらにクラクションを鳴らして、私にうさん臭そうな目付をあびせた。

しかし私の心はもう遠い半世紀も昔の想い出の境地を彷徨っていた。私の目の前にはボンヤリと黒

ずんだ教會跡の古い建物が現れた。窓から大声をあげて詩吟をうたっているのは清水春吉君である。三階の薄暗い「祈りの間」では佐藤英次郎君が支那の墨刷の手本で余念がなかった。あゝ自動車が入口のところに着いた。中からやおら出てこられたのは藤田先生だ。スリッパのような靴をはいて、やってるやってる、プップッと唾を飛ばして、「皆……元気に勉強しているか……うむ……うむ……」自動車は出ていった。

この今にも崩れ落ちそうな教會跡の建物こそ、東京における藤田育英社のそもそもの始まりであったのである。

(三)

私の足はどこをどう歩いたのか、気がついてみるとそこは六本木の十字路である。渋谷方面に向って最初の露地を右に曲って、またその辺りをうろうろと歩いてみたがそれらしい家はなかった。私が胸にえがいたのは、古い二階建の建物で、銘刈医院という小さな看板のある所だ。ここの銘刈正太郎先生は沖縄かどこかの人だが耳鼻咽喉特に鼻の手術の腕をかわれて、当時の財界人たちの後援を受けているとのことであった。私は藤田先生の「命令」でここで鼻の手術を受け、その後も風邪をひくたびにここに通った。

藤田先生は、いつも「原、お前ちょっと待て」といわれるので「ハイ」といって順番を譲ると、決まっているかのように、後藤新平閣下や、この人とは風采の上で対象的な金子直吉氏（神戸の鈴木商店の支配人）や京都の風間八左ェ門（嘉雄君の父）などが現れて私は最後まで待たされた。私はこう

して藤田先生のお蔭で、当時の政界や財界の人たちの謦咳に接することの出来たことを深く感謝する次第である。

(四)

藤田育英社がいつ頃から蛇窪（現在の国鉄大井町駅から徒歩二十分ほどの地点）に移転したのか私の記憶ははっきりしない。私たちの寮は藤田先生の大きな邸宅の前の土手のような道を越えて反対側にあって、馬鹿デカイ明治式の洋館建ての寮と広いテニスコートがあった。

舎監は畑さんといって剣道五段の巨人のような人で、「藤田先生の命令だ」といっては私たちに早朝から稽古をつけられるのにはホトホト閉口した。そのうちに田村豊君がメキメキ上達して、時々畑舎監をまいらせた。私は一番弱虫で、度の強い近眼の風間嘉雄君にさえ叩かれていた。佐々木一二君は野球狂とあだ名されるくらい、ことベースボールに関してはエンサイクロペテック（百科辞典的）な知識を持っていた。また細かいことに気のつく人で友だちの世話をよくした。重信秀矩君は九州男児で、薩摩の言葉だけが真の日本語だという説をガンとして曲げなかった。この人は拳固で瓦を割るという乱暴者だったが、一面文学を好み樗牛の「滝口入道」などを諳誦した。私もブラウニングの「マイ・ラストダッチェス」などを聞かせたりした。二人はよく寮の裏手から出て、その頃まだ残っていた武蔵野を逍遙したものだった。

そのほか、東繁太郎君、小野寺康君（弟が碁の天才でその頃すでに初段の腕前があった）、川田孝雄君などがいて、藤田育英社の若者たちの巣は今から想うと人生の花であった。

(五)

私は藤田先生の母校の明治大学を出ると、コロンビア大学の入学許可書を握って渡米したが、かの地における学校生活のあとワシントンに在る日本大使館に奉職（現地で任官したのは明大卒では私だけだと聞いた）するようになり、十七ヶ年もの長いアメリカ生活を続けてしまった。大使館に入るまでは所謂「文学青年」を気取ったりしてほとんど日本人社会とのつき合いの無い生活をしていたくらいで、藤田育英社ばかりでなく、総べての内地との連絡が杜絶されたままになっていた。そして交換船で帰国してみると、日本は戦争中の異常な状態で、何かこう「リッバンウィンクル」（浦島太郎）の物語りのように、違った国に帰って来たのではないかしらとすら思われた。

交換船は八月二十日に横浜に着いたが、その翌日陸軍省から呼出しの通報が来て、「英語ができるから」というので大本営付きを命ぜられた。これがまた外部との交渉を何かとおくらせることになった。加うるに戦局は仲々むずかしくなっていって、藤田先生のことが気にかかってはいたが、先生との再会の機会は一日一日と延びていった。

ところが或る日パッタリ（省線電車のなかで）佐藤英次郎君に出くわしたのが始まりで、再び藤田先生との交流が復活した。佐藤君は当時歌舞伎座の隣りに小さな書道塾を開いていた。とにかく「藤田の残党」で寄ろうじゃないかというので、この界わいに明るい佐藤君（彼は銀座っ子で彼の兄がお鮨屋だったと記憶する）の肝いりで「弁松」で第一回の「藤華会」の集りを催した。

(六)

佐藤君の案内で私は丸ビル（旧）五階の藤田先生の事務所に行って十幾年振りで先生にお目にかかった。先生が最初にいわれたことは「君、ハルという男はどんな人物なのかね……」であった。私は先生が相当日米関係のことに心を砕いておられることを感知して、交換船のなかで皆で手分けして調べたアメリカの国内情勢特に私が担当した軍事生産面についてお話しした。

先生はこのとき既に北支や満蒙方面に連絡をとっておられたらしく、後に私に紹介された下山茂助という人は先生の満蒙方面の「参謀」であったと聞く。北支方面での○○公司との企画を漏らされたので、私はかつてアメリカで知り合いになった（支那大陸や満蒙で馬賊生活の体験者だという）柔道五段の手代木禎二という人を先生に紹介した。三人は国電大森駅から十分ほど歩いた所の某料亭で「秘議？」を重ねた。この料亭の女将は親切な人で、戦時中の物のない時なのに色々とご馳走をしてくれた。帰路先生と女将が肩を並べて歩く後ろ姿を見て、手代木さんは私に「二人は仲がいいね。あれは藤田先生の昔のこれだったかもしれないね――」と小指を出したが、何分にも若いときに日本を去った私にはその意味を直ぐ察知することができなかった。

大井町の本邸で続けておられた藤田育英社にお伺いしたとき、私は蒙古の王子「トガルソロン」という貴公子風の青年に紹介された。

後日先生から「何んとか蒙古に帰国させたいが飛行機を手配してもらいたい」と御依頼を受けて、色々努力した結果、軍用機でこの青年を送ったことを思い出す。

(七)

昭和二十年八月戦争は終った。私は短波を傍受していたので前からこの報を知っていたが街では誰も知っている人はいなかった。若い将校が気違いのような甲高い声で何か命令をしているのが聞こえた。しかしこのとき、その後に続く何年もの長い、辛い、「平和の戦い」が私たちを待っていようとは夢にも考えなかった。

先づ厚木におりたマッカーサー将軍を出迎える。続いて横浜に米軍が上陸するというので、県庁のビルに対策本部が出来てそこへ行く命令だ。何しろ当時は英語を話せる人は少なかった。私は朝から晩まで文字通り引っぱり廻された。

この間前田晴康氏（根岸耕一氏と共に先生の右の腕とも左の腕ともいわれた人）との連絡がとれて、私が米軍司令部関係の仕事をしていたので、前田氏の材木のビジネスを手伝ったこともあるが、私はどうも商人のスリュードネス（抜け目のなさ）が欠けているらしく、その後「極東裁判」のキーナン側の通訳官・翻訳官となったのがきっかけで、母校の明治大学に教鞭をとることになった。

(八)

藤田先生が亡くなられ後、佐藤君は「藤華会」のもり返しに何かと努力したが、人情が冷たくなったと一概には言いきれない現代社会の複雑さと繁忙さからか、集りは次第にかげが薄くなっていった。そして佐藤君も今は天国の人となった。私も藤田先生の亡くなられたとしにだんだん近くなって、先生のことを考えるたびに淋しさが胸までこみ上げて来る。

こんな或る日、嵐のような勢いで飛び込んで来たのが楠美省吾氏だった。私は未だ知己がなかったので、佐藤君と作った名簿をみたら楠美氏の名前がちゃんとあった。話していると私がアメリカへ行く前の藤田先生を彷彿させる何かを感じてびっくりした。

この人の熱なら藤華会の再建は出来ると私は思った。今度「藤田謙一先生顕彰会」の会長になられたことはまことにうれしい。私も乞われるままにここに拙文を書かしていただいてまことに光栄である。これを機会に東京と弘前の育英社が合流して、藤華会の再建が実現されることを切望してやまない次第である。

藤田育英社の思い出

斎藤武博
（元郡馬県住宅供給公社理事長）

「本月二十日、武博、藤田謙一氏ノ育英社生ニ採用セラル（大正十一年七月）」父の日記に書かれた藤田育英社との関係の始まりです。

私は明治四十三年四月一日の生れですから、満十二才、県立弘前中学校一年生、第一学期の終り頃でした。当時の斎藤家の財力から見て、私を中学に進学させる事は容易な事ではなく、一人ある姉が、飯詰小学校で、臨時の先生をして、学費を送る手助けをしてくれたのですが、中学校の寄宿舎に納める舎費が、定められた日に納められた事は無かったように覚えています。

当時、寄宿舎生は、朝六時起床、直ちに廊下に整列、本校の道場で、約一時間、剣道か柔道の稽古をし、それから朝食という生活でした。このような時代でしたので、育英社においても、朝食前、裸身で、自彊術（体操の一種）や、冬期は、清水に浸ることなどをしたものでした。

育英社の屋敷は、数千坪の広さがあり、放課後はテニスコートで、毎日のようにテニスをしたものです。

庭園の中には大木が数本もあり、秋も終りになると、毎朝栗拾いをし、学校から帰ると茹でて一緒に食べるのも楽しみのひとつでした。

私達の入社の頃には、数名の先輩の方が居りましたが、正式の社生としては、大正十一年四月から入社した小田切潔君、川崎邦夫君と、八月下旬から入社した私の三人が第一回生とも言うべきものでした。

育英制度にも色々ありますが、藤田育英社は勉学に必要な経費を九十九パーセント支給したと言って過言ではありません。毎日の食事は、昼の弁当を含めて、夫婦の賄さんが作り、学校の授業料、校服、靴、靴下、教科書、辞書、文具類等も支給されました。

支給の学費は、一切辨償、返済の必要は無く、本人の信念に基き、全力を傾注して、国家社会に貢献すれば、それでよろしいとの方針でした。

大正十一年から十五年三月迄の中学校四ヶ年、大正十五年四月から昭和四年三月迄の、併せて七ヶ年は、藤田育英社の弘前時代でした。

その後昭和四年四月から、昭和七年三月迄、東京帝国大学文学部教育学科の時代であり、育英社生活が終る迄、実に十ヶ年に及ぶ、年月であったわけです。

昭和四年四月から七月迄は大井町の社宅、九月からは吉祥寺の修養社で、郷里出身の大学生との共同生活でした。

十ヶ年に及ぶ藤田育英社の生活中、特筆すべき事件を一つだけお知らせしたいと思います。

岩木山麓の嶽には、一千町歩ほどの広さの藤田農場があり、夏休みには、昼すぎに、弘前から歩いて出掛けたものです。

午前中は、農場の雑草取りなどをし、時には岩木山頂に登ったり、時々夜は、小豆の苗を食べる野兎の跋扈を防ぐため、空砲うちに出掛けたものでした。

大正十四年八月下旬、私が中学校四年生の時、後輩の育英社生五名と共に、昼食を携えて、農場附近を探索中、遙か彼方に、日本海と思はれる煙波が輝き、来れ〳〵と囁く声が、私達を招くかのように感ぜられ、一同我を忘れて、山を降ることとなりました。

最初は、一、二時間で、麓に到着出来ると思ったのですが、行けども〳〵麓は遠く、夕方頃漸く町にたどり着き、まず銭湯で、埃と汗を流しましたが、極度の疲労の為、湯船から出たとたんに、寝込んでしまった有様でした。

懐中には、旅館にとまるほどの金はないし、さてどうしたものかと思案の結果、お寺に事情を話し、私達は藤田育英社生で、弘前中学校の生徒である旨を話し、一夜の宿をお願い致しました。快く引き

受けてくれ、夕食にはおいしいお魚の料理、立派な夜具、蒲団、床の間つきの部屋で、私達を厚遇してくれました。

当時玄米一俵十八円八十銭と記されてありますが、父の日記を借用して、この冒険旅行を締め切りたいと思います。

（武博鰺ヶ沢方面ニ旅行中、竹谷ニ、一泊、ノ由ニテ、自宅ニ来リ（註、五所川原町、下平井町）宿料、汽車賃、六人分借用セリ、十五円、十時着、十一時二十分帰リタリ）

この旅行については、大目玉を覚悟して居りましたが、両親は兎に角、育英社の方々が、無事で良かったなあと、一言の叱責も無かったことは真に意外でした。

昭和七年三月東京帝大を卒業しましたが、当時大学は出たけれどもという言葉がありましたように、就職難の時代で、一ヶ年大日本聯合青年団の社会教育研究生（研究手当月三十五円）となり、昭和八年四月から、神奈川県庁学務部社会教育課勤務、月手当七十五円が支給されました。

昭和十四年八月十五日、臨時召集の為、青森歩兵第五聯隊に応召、昭和十六年十月、群馬県学務部社会教育課長、三十二年十一月、総務部人事課長、三十九年十月、群馬県出納長、四十三年十一月、郡馬県住宅供給公社理事長、現在は非常勤で、財団法人郡馬メデカルセンターの監事をして居ります。

往時を顧みて夢のような気がしますが、いつも変らぬ藤田先生の温顔と、広大無辺の慈悲の心が、年を経るにつれ一層有り難く感ぜられます。（昭和六十三年一月八日・前橋市古市町の自宅にて）

育英社生活ほか

時子山　常三郎
（元早稲田大学総長・日本私学振興財団理事長）

東北地方から著名な政治家や軍人、外交官の出ていることは、広く伝えられるところであるが、藤田謙一先生のような偉大な実業人の出ていることは、今日の若い諸君にはあまり知られていないようである。昨年、先生のお墓参りをして、あれだけ郷土のために尽された生地でも、案外にそうなのではないかと心淋しい気がした。ところが先生の盟友であられた楠美芳幹氏の令息・省吾さんから、先生の遺徳を偲ぶ郷土の方々によって、いよいよ『藤田謙一顕彰会』の計画が具体化されているのを知らされ、わたくしの思い違いであったことを今に反省している。

実業人としての先生を偲ばれる方々は多いと思うので、わたくしはお世話になった育英社生活ほか先生のご恩について思い出すままに記したい。

実は、先生の奥様の親戚であられた畑要造さんが日活の支配人をされていたが、育英社の社監を兼ねておられ、たまたまわたくしの縁戚の者が畑さんと師範時代からの親友であった関係から、畑さんのご紹介で藤田先生の知遇を得、育英社に寄宿を許されたのである。もともと育英社は弘前高校（旧制）出身の英才を育成するところと承っていたが、例外として京都の風間さん、和歌山の徂徠さんなども寄宿を認められており、大阪出身のわたくしも同様の例外として扱って頂けたのである。

育英社は東京近郊、大井町に近い当時蛇窪と呼ばれていた所に在り、藤田本邸に近く、堂々たる舎屋で二階の広間にピンポン台が、庭にはテニスコートなどもある立派な施設であった。食事にしてもそれまでの下宿生活では期待できない栄養価の高い賄いで、若い舎生にはつくづく有り難かった。

こうした厚遇を受けていた舎生にとって、大きな教訓となった逸話がある。藤田先生の坊っちゃん達がときどき育英社へ遊びに来られたが、ある時明るくなっても電燈を消すのを忘れていたのに気づかれた坊っちゃんの一人が「オヽ、もったいない」といわれて電燈をお消しになったことである。あれだけ各方面に多額の浄財を投じて援助をされながら、このような家庭教育をされているのかと舎生一同大きな感銘を受けた。尤も他方ではいかにも大家の坊っちゃんらしく、その頃有楽座というのができて、徂徠さんや坊っちゃん方といっしょに観賞に行ったとき、三階あたりで大勢の観客が込み合っているのを見上げて、あんなところに大勢集まらないでここへ来ればよいのにと、自分のいる特等席を見渡していたようなこともあった。ついでに申し上げると、畑さんの奥さんが、お嬢さん方の家庭教師のようなことをされていたようであるが、女学校の上級ともなると、数学の宿題は手に負えないらしく、ときどき明朝までに解答を出しておいて欲しいと持って来られたが、あるときなど問題があまりに多く、朝まで間に合いそうもないので斎藤義雄さんに手伝って貰った記憶がある。

舎内で困ったことの一つに、舎生が弘前出身なので、お互いに郷土弁で話し合われると何やら判らぬことがあった。わたくしは最年少の小山敏夫さん（東京物理学校―現東京理科大学学生）と、玄関わきの十二畳間に同居していたが、夜、電燈を消して話しているうちに小山さんが「ダイシー、ダイ

シー」と聞える発音をされるが、どうしても判らない。「英語で言ってごらん」というと、「アルゼブラ」と発音するので、何だ代数かと笑い出したことがある。むかしの人が謡いの文句を仲介として話し合ったという故事を想い出させられた。

毎晩のようにピンポンを楽しみ、このほか下手なテニスをしたり、砲丸投げの練習をしたりしたが、それまで飛ばなかった砲丸が、ちょっとフォームを教わっただけで、意外に飛んだので、学修についても同様なことがあろうかと思えて、師匠の如何で弟子が伸びたり伸びなかったりするのではないかと考えたりした。学修といえば、当時『藤園』という藤蔭門下誌が創刊され、いまから思うとゾッとするような論文めいたものを寄稿したこともある。（「藤蔭」は藤田先生の号）

ときには舎外にまで出て徂徠俟さんと「玉つき」を興じたが、ゲーム採りの手許にめいめいの名前を届けることになっていたので、それぞれ「徂徠」「時子山」と書いたところ「ごじょうだんでしょう、本名を書いて下さい」と言われて苦笑した異名物語りもある。

弘前組の一番先輩は館山さんで斎藤、田村、大久保さんらが続いていた。良き寮友に恵まれて楽しい寮生活を送ることができた。わたくしにとって唯一の寮生活であっただけに思い出がいっそう深い。

大学院に進学してから当然育英社を離れたが、わたくしの早稲田における恩師塩沢昌貞博士と藤田先生とが共に『人口問題研究会』の委員であった関係で、育英社を出てからも藤田先生から格別の恩寵を蒙った。先生がわたくしの配偶者までお世話下さるというので「この頃は先生が君の写真を懐にして候補者探しをしておられるそうだ」と徂徠君から伝え聞いたが、推薦下さる候補者が私にはあま

りにも不釣合いに立派な方々なので、いずれもご辞退して了った。ただ、わたくしの結婚式には塩沢先生が媒酌の労をとって下さることとなり、藤田先生に当日の主賓としてご出席をお願いしたところ、「刑事被告人が主賓でよいか」とか仰ったが、結局お引き受け下さるという有り難い光栄に浴した。なお留学のさい「いまでは留学費の援助もできないで申し訳ない」と仰った。何とも申し上げようもない先生のお言葉は、永久にわたくしの耳朶から消えない。

先生は東京商工会議所会頭のほか、満鉄総裁の候補者に擬せられるとか、商工大臣に推薦されているとも聞いたが、さる事件のためとかで、ついにこの偉材が国家経綸の才を発揮する機会を得られなかったことは、返す返すも残念である。

2、官立弘前高等学校

弘前高等学校は大正九年（一九二〇）十一月二十六日勅令第五五一号を以て創設された。そして入学式は大正十年四月十一日、文科一二〇名、理科八〇名、計二〇〇名を迎えて仮校舎弘前公会堂で行われた。また開校式は同四月十六日仮校舎において行われた。

官立弘高設置の運動は大正六年九月、寺内内閣・岡田文部大臣らに弘前市が設置請願をしたことに始まる。十一月県会も運動を開始した。川村知事時代である。この頃東北で官立高校設置を希望した県は青森と山形の二県だった。

大正七年、山形県は設立費五十五万円の準備体制が出来たとして激しく意欲を燃やした。青森県も竹内清明が中心になって政友会が動きやがて憲政会も動いた。青森、弘前の記者団も動き、県民運動となった。

かくて三月九日、青森県各新聞社と県会正副議長発起の高等学校誘致の県民大会が午後二時、青森市公会堂で開催された。総勢千二百名、弘前からは客車四輌の特別列車仕立て、黒石からも五〇名余、代議士、県会議員、市町村会議員、理事者など各地区各階層の代表者だった。大会は七ヵ条の実行方針と決議を決定、実行委員五〇名を選出した。

一方、県出身の在京者で本県の振興に焦心している人は高等教育機関設立に関して、以前より文部省当局や各政党と接触し配慮していたがやはり県民大会開催の九日京橋の交詢社に集まり、高等学校誘致問題を協議した。出席者は藤田謙一、今裕、菊池武徳らである。そして実行委員十名を決定した。メンバーは次の通りである。藤田謙一、平沢均治、今裕、菊池武徳、工藤鉄男、三浦勝太郎、松岡正雄、中野浩、工藤十三雄、阿保浅次郎。

かくて誘致のために県内外の運動が開始され、三月下旬には青森県有望説が流れたが、まず大正七年度の新潟、松本、松山、山口、四校増設が認められ、ついで九月には山形高校の大正八年度新設が決定し、青森県は苦汁を飲んだ。

しかし大正七年九月二十一日、寺内内閣が退陣し、九月二十九日、平民宰相原敬の政友会内閣が誕生するとともに竹内清明、伊藤重、石郷岡文吉ら本県の政友会は猛運動を再開し、かくて大正八年度

追加予算の中に弘前高等学校創設費がもられた。

ただし高等学校の青森県の設置が決まると弘前市と青森市の間に感情的齟齬がおこり、両市の間で誘致合戦がおきたが一月二十六日、弘前設置に決定した。高校新設費は総経費七十六万円だが、うち四十万円は青森県が引きうけ、その中の十万円は弘前市提供となった。弘前市ではこのうち五万円は市有財産の処理により、あと半分は一般市民と有志の寄附をあおいだ。

しかし大正八年から景気が逆転し、九年には不景気となり物価大暴落し商店は投売り、低米価は農村の死活問題となり、寄附金募集も容易でなかった。結局高額百円以上の寄附者は八二名、一般もあわせ三万九千一二〇円となったが、五千円を出したのは藤田謙一ひとりだった。次は宮川久一郎の四千円、二千円が第五十九銀行、木村静幽、津軽義孝だった。

大正八年十二月二十日付で石郷岡市長より藤田謙一に次の礼状が出されている。

謹啓　時下愈々御清康奉慶賀候

陳者今回高等学校建設費に対して五千円御寄附被下置候加之更に本市青年団基金中に三千円御捐出被成下候段、御厚志の程感謝に不堪候、為めに市民一般の感奮興起甚大なるもの有之公共事業発達上莫大の貢献を払はれ候次第、茲に当路者一同を代表し謹んで謝意を陳し申候

官立弘高はこの後も物心両面にわたって藤田謙一の応援をうけている。次の弘前新聞の記事（大正十三年一月十日）はその一例である。

「弘高映画研究会では来る十八日の同校落成式を機とし午後五時から生徒控所に於て活動写真会を開催し本市の人達に謝恩的意味を以て無料公開をなす由である。当日の映画は宗教劇『ミラクルマン』八巻、文芸物『ヂキル博士とハイド氏』七巻、喜劇『ロイド』一巻で弁士からオーケストラから全部同映画研究会の役員が出演するとの事で真面目なファン達には多大な期待を持たれている。

なお今回の経費の大部は同会の幹部の村上氏が上京、藤田謙一氏に懇請の結果、藤田氏の厚意によって実現をみるに至ったものである。

村上氏は各会社を歴訪交渉の結果、近く『ドクトル　マブゼ』『散りゆく花』『イントレランス』『乗合馬車』『男女結婚・東への道』の高級映画を本市において上映すべく協議がまとまった。」

なお、次の楠美省吾氏の三十万円寄附説は記録があるということなので参考にしたい。

藤田謙一さんのこと

――官立弘高50年祭に寄せて――

楠　美　省　吾
（元衆議院議員・日産サニー弘前販売㈱社長）

早いもので私がかつて学んだ官立弘前高等学校が設立されて五十年が夢の間に過ぎた。九日から十一日にわたって弘高五十年記念祭が花々しく開かれ、全国各地から青春の地、弘前をなつかしむ数百人の同窓生が相つどって盛会だったが、私はこの日の喜びをともにしてほしかった故人として藤田謙

一さんを思い出した。

藤田さんは私の父の親友だった。その縁で私も代議士時代、晩年の藤田さんとは側近のような深い交際をしていただいたのだが、弘高五十年祭も迫ったごく最近になって、藤田さんが官立弘高の建設に当たって三十万円を寄付されたという記録を知って驚いた。と同時に、自らの不明を恥ずかしく思った。

官立弘高は当時、七十万円（現在ではざっと十億円か）の建設費を要し、県が三十万円、地元弘前市と有力者が十万円出費して開校にこぎつけたことは知っていたが、藤田さんがそれほどの大金を寄せられていたとはついぞ知らなかった。

人間、いつどこで、だれの世話を受けてるかわからないものであると感じ入った。

実は私、敬愛する郷土の生んだ実業家、藤田謙一さんの伝記を編さんすることを主唱して、全国の知友に呼びかけ資料を集めている最中、出身地の弘前である藤田さんの業績を知る人は少なくなっているので、この際、その生涯を紹介することも意義あることと思い立って筆をとった。

弘前市五十石町の士族明石家に生まれ、藤田家にはいってこれを継いだ。東奥義塾から明治法律学校に進み、栃木県属官となる。この当時、たばこが専売制度になる問題が起こり、藤田さんは〝たばこ王〟といわれた岩谷天狗煙草の応援をし、それが実業家に飛びこむ動機になった。

朝鮮の京城で印刷会社を経営、台湾で製塩事業をやって成功し、ともっぱら海外で力をたくわえた藤田さんは、日の出の勢いで日活社長、合同毛織社長・東満パルプ社長など数々の事業を経営された。

藤山愛一郎氏の父、雷太氏と争って東京商工会議所会頭に就任、日本財界を代表してジュネーブの国際会議に列席したころは藤田さんの最盛期であったろう。藤田さんの遺族と親しい弘前相互銀行の葛西専務によると、当時、今も弘前市に弘前相互クラブとして残る別邸をはじめ、各地に三十八の別邸を所有していたという。

昭和三十年ごろ、ラテンアメリカ協会の発起人会が東京の華族会館であった際、私も出席したが、足立日商会頭、一万田蔵相、藤山外相ら政、財界の大立者ばかり集っての雑談のなかで藤田さんのうわさが出たとたん、異口同音に「あれだけスケールの偉大な事業家は再び日本の財界人から出ることはあるまい」ということである。

藤田さんは郷里の弘前市に公会堂を寄贈したほか数々の仕事を残された。しかしその最たるものは青年学徒の訓練事業だろう。官立弘高が誕生してから東京と弘前に藤田育英社を組織、三十五万円を投じて育英の事業をされた。また岩木山麓枯木平に八百数十ヘクタールの農牧場を経営して、その利益をすべて育英資金にあてられた。欧米に留学生を送る事業もされ、百数十人の青年が育英社のバックアップで世に出たはずである。今日、わが国政、財界の相当の部分を占める人材が藤田さんの手で育った。（下略）」――東奥日報昭和45・10・11掲載

3、藤田農牧場と東奥義塾

楠美省吾の語る所によれば藤田謙一は死の床において「東奥義塾に寄附した枯木平の農場は売却しないで保存させるように笹森塾長に伝えてくれ」と遺言のように力を入れて言ったという。敗戦ですべてを失ったこの老実業家がなぜこのように東奥義塾に、枯木平の農場に執着したのだろうか。

それはやはり藤田農牧場の前身が弘前藩士や明治政府が一大決心で経営した士族授産事業の農牧社であったこと、さらには藩政期の藩営牧場という由緒ある土地であり士族の家に生まれた藤田謙一にとっては永遠なるものだったと思う。

藤田の経歴における東奥義塾は、在学したのは二年間であり、しかも授業内容に不満があって退学したのだった。さらに三学年編入試験には失敗する苦い目を味わっていた。しかし藤田の心には自分のすべての原点が東奥義塾への受験勉強と短かかったが魂に触れるものを持っていたキリスト教精神の学風、何より藩校としての歴史的存在感、ひたむきだった自分自身の少年期への思いなどが凝固していただろう。

(1) 藤田農牧場について

東奥義塾に寄贈される直前の農牧場について「青森県総覧」は次のようにのべている。

「藤田農場は弘前市を距ること西方五里半、岩木山麓の中津軽郡岩木村大字常盤野にある。該牧場は

曽て元和年間津軽越中守信牧侯の創設せられたる馬牧場で、天明の大飢饉及天保・明治（十一年頃、二十一年頃）凶荒に遭って四度廃滅したが五度復興し、而かも宮内省から引続き補助を受け、又は良馬の無料貸下げを受ける等、もっとも由緒ある馬牧場であったが、経営宜しきを得ず、数年来また荒廃し、すでに他に競売せられたるのを藤田謙一氏が買収し、藤田育英社の基本財産と為す意思をもって大正八年十月から経営した。その面積は八百九町六畝十六歩である。

藤田氏が土地を買収するや実弟明石桐一氏を其の主任とし、別に専門家を嘱託して実地調査を行い、総反別のうち開墾適地約三百町歩を選定して耕地整理法並に開墾助成法に基き青森県に申請し、水田八十七町六反七畝十七歩、畑百八十五町七反四畝十六歩の開墾と之に伴う水路、道路を開削並に附属工事を施工した。

一方においては理想の農村を組織すべくその完成期を昭和四年までとし、大正十四年度迄に開墾の外はすでに九分通り完成した。而して建築物としては仮事務所として従来の建物に一大改築を施した外、農具倉庫、機械工場、乾燥室、人夫収容所、収穫倉庫等必要な諸建築物の外、社宅三棟、移住民宅三十二棟の建築を終わり、現在二十戸の移住小作人と四戸の常傭人夫と、九名の技手並に場員を使役し、既墾地は小作と直営とによって経営し、かたわら未墾地は昭和四年度までに完成の予定で工事を進めている。

移住小作の者は夫婦二人の者であれば水田一町歩、畑二町歩と限定して耕作させ、家族であって労働に適する者が増加するに従って耕地を増加し、生計を容易にし、未墾地の開墾にしたがい移住民を

増加する予定で家屋の建築も昭和四年度、さらに二十三戸を増加する計画である。」

なお藤田農牧場には自動車部があって事務所は新坂上にあり市民のタクシー需要に応じていた。

大正八年、組合経営の常盤野農牧社を譲渡された時の価格は四万一千円だった。

(2) 藤田謙一と母校

再興した東奥義塾は大正十一年四月開校、塾長は笹森順造、評議員に珍田捨巳、佐藤愛麿、岩川友太郎らの長老先輩とともに藤田謙一も加わった。同年六月二十八日の創立記念日には弘前市長石郷岡文吉、藤崎町の篤志家長谷川誠三、実業家木村静幽、それに山鹿元次郎、ウェルチ監督とともに藤田も感謝状をうけた。

また、大正十二年の創立記念日にも県知事・弘前市長とともにまた功労者として感謝状を受けている。

大正十三年十月十三日、在京理事評議員会を青山ハリス館で開いた。案件は当時義塾卒業生に上級学校入学資格及び官吏任用上の資格が与えられていなかったのでそれへの対策だった。原因は学校の設備が不充分ということなので笹森塾長は五万円以上の寄附金募集を考えた。

評議員の珍田、藤田、岩川それに広沢辨二が集まり、藤田は即座に金一万円の寄附を申込んだ。かくて募金は順調に行き大阪の木村静幽も一万円、弘前でも高谷貞次郎が一万円を寄附するなど寄附金は六万二千円に達した。この事は後述の笹森順造の「育英の片鱗」でも触れたい。

同年十一月二十三日、藤田は帰省し、正午より生徒一同に講話を行った。「諸君はすべての方面に対

し、偉い人間になれ、それには努力が第一である」と自己の体験談を話した。

昭和三年四月七日再び壇上に立った。内容は立志成功と努力勤勉の体験談で生徒に深い感銘を与えた。今回はジュネーブのＩＬＯ総会に日本使用者代表として出席するに先立った帰省だった。そしてこの時、母校の財政安定のため、岩木山麓八百余町歩の藤田農牧場の資産全部と在弘藤田育英社の資産全部、時価壱百万円を超えるのをあげて東奥義塾財団法人に寄附した。

藤田謙一について笹森順造（国務大臣・参議院議員・青山学院大学長・東奥義塾々長）は次のように書いている。

「藤田謙一伝を刊行するから、その思い出を書くようにとの申越しを不破謙友氏から受けた。この傑出した大人物につき私の接触したのはその片鱗にしか過ぎない。財界人としての不世出の偉業については語るに適切な人は他に多くある。伝記の主人公は大いに成した財を私せず、公共教育育英のため貢献することを喜びとした。この奇篤な一面として藤田育英会を東京及び弘前で興し英才を養った。とりわけその母校東奥義塾の教育振興、財政基礎確立のためにその私有地たる広大なる岩木山麓常盤野農牧場とその施設設備を挙げて寄贈した。その際私は義塾側にあってその寄贈を受ける立場に立った。」

「東奥義塾は私立学校として時には文学専門部・中学部・小学部等を設け、教育業績を挙げたが経済財政の難局に会い、之を弘前市立になし、更に青森県立に移管したが、県の財政の都合により明治の末期、之を閉鎖するの悲運に会い、その土地建物を東奥義塾育英会が保存し、青森県立弘前工業学校

に無償で貸付けていたが、大正十年に至り、義塾開校以来密接な関係があった米国美法教会の厚意ある寄贈金により義塾育英会と協議の末、義塾再興の議、纏まり大正十一年に再興することになった。」

さらに笹森氏は次のように記述している。

仮校舎のこと　大正十一年、弘前城南追手門外稽古館跡の東奥義塾校地校舎は東奥義塾育英会が保有し、県立工業学校に貸し無償で使用させていた。義塾再興のため、工業学校に転出を申入れたが道岡青森県知事は十万円の移転料を要求して転出に応じない。四月開校の義塾は校地校舎を他に物色せざるを得なくなった。時あたかも義塾の先輩藤田謙一が東京商工会議所の会頭という財界の雄で、弘前市に宏壮な公会堂を建設して寄贈したので、市が従来使用していた時敏小学校跡の旧公会堂が不用になり、それを藤田謙一に譲渡してあった。それが空いて居ったが、再興の義塾が仮校舎としては充分用を弁ずる。それを義塾が藤田先輩から借受けて再興の開学に踏切ることにしたのである。藤田先輩は寛大にも無償で使用させてくれた。先輩の愛護による幸先のよい発足であった。

藤田謙一先輩・母校来訪　大正十三年十一月二十五日、旧義塾大先輩藤田謙一帰郷の好機に本塾に招き、職員生徒のため一場の訓話を願った。訓話に先立って私は大様次のような紹介を行った。「ここにお迎えした藤田謙一大先輩は旧東奥義塾が産んだ諸先輩中、日本財界に於ける第一人者である。由来本県人は経済力に乏しいとの批判はこの大先輩によって一挙に吹飛ばされている。私は先年米国に留学中、義塾が再興されるという話を聞いた時に、前義塾の廃校となったのは財政難からであったが、

今度再興するには必ず有力な支援の先輩が居るに相違ないと思い、すぐ頭に浮んだのは当時海外にも其の名の轟いておる神戸の鈴木商会で、飛ぶ鳥も落すという財界の偉人、今ここにいる藤田大先輩であると思った。今後本塾は大いにその愛護によらなければならない。諸子は幸にこの大先輩の謦咳に接することができた。大きな目をあけ、耳を傾けてその教えを聞きなさい」と。

藤田先輩に壇上に立ち、青少年時代困窮に打剋ち苦学した経験を語り、「何事も奮闘努力すれば必ず成るものである。後輩よ、英才よ出でよ、大志は努力によってのみ成る」と。なお話を継いでいうのには「予はいま事業を行い財を造っているが、人は一生を生きてゆくのに費用はいくらもかかるものではない。日に三度の食事で足る。衣は寒暑を凌げばそれでよろしい。住宅も一軒あれば用を弁ずる。従って成した産は後進者の育英のために捧げる考えだ」

と義塾援護の意志をも表明された。

学校法人基本金醸成問題　再興東奥義塾は特色ある私学とし、人格修養を旨とし宗教教育を施し、聖書を教え、基督教礼拝を行う自由を以て学科課程に付いても文部省令に束縛されぬという、各種学校令によりながら、特権に公立学校と同等であるべきためには様々の条件を要求されてある。その特権というのは四年修了者が官公立の高等専門大学並びに陸海軍将校学校入学受験資格並びに判任官資格である。その指定認定を文部省並びに陸海軍より受けるのは第一は一定の校地校舎施設、設備備品、図書等を有する事、第二は文部省が認める有資格教員が一定の数に達する事。第三は生徒の学力が文部省の示す規準以上に達する試験を通過する事、第四は五年完成卒業生を出す迄の必要経費収入計画

の立っている事。第五は学校法人の基本金最低五万円以上を有する事、この第五について私は上京して諸先輩に訴えたところ藤田謙一先輩は一万円寄付された。続いて木村静幽・高谷貞次郎両氏各々一万円その他桜庭駒五郎・横島直弥、杉野喜精、米山梅吉等各五千円宛の寄付で二週間にして所要の五万円に達し、文部省に報告し、指定を申請し許可を得るに至った。

農牧場の寄附　東奥義塾財団の教育財政確立拡充につき、文部当局と私がしばしば折衝している間に係官の一人は私に対し、学校の財力基礎を図るためには藤田謙一所有の常盤野農牧場を義塾が寄付を受けるのがよかろうと示唆した。その理由として言うのには、右所有者は育英事業に熱意あり、右農牧場を以て育英財団を作る考えがあるが、それは適当でないので文部省は同意し兼ねる点がある。それよりは義塾が学校実習地の資産として寄附を受けるのは最も適当と思う。機会を得て所有者と話し合うのがよかろうとの次第である。

義塾の大先輩藤田謙一は当時東京商工会議所の会頭に挙げられていた我国一流の大実業家で八面六臂の大活躍をしていたが、郷里関係の一事業としては往年の津軽藩の農牧場、嶽枯木平一帯の山村原野農牧場八百余町歩を所有していたが、地域住民の生産開発と国益を図るため、開墾、開拓、開田、開畑、造林の事業を行っていた。この開拓事業の達成のために国家も力を入れ農林省が年々十七万円の助成を行っていた。そのため開拓労務家族三十五軒、馬匹三十五頭、キャタピラ耕転機四台、軌道トロッコ十哩その他多数の器具機械と住宅家屋・倉庫・小屋等を建設し導入していて、盛んに活動し、人里離れた山奥に現代的開発の響きが四隣に轟いて居ったのである。

昭和三年春藤田事務所から連絡があったので、私は上京して藤田先輩を訪ねたところ、言うのには「私は日本の資本家代表として、スイス・ジュネーブで開かれる世界経済会議に出席するために旅行に出掛けるのだが、シベリヤを通ってゆく。自分は理事会代表で共産国を通ってゆく。途中でどういう目に会うかわからないから、かねて思っている問題を整理してゆきたい。その内の一つは常盤野農牧場の事である。あれをかねて相談を受けていた東奥義塾の財政確立に役立たせるための基本財産として寄付したいが、採納してくれないか。それについては開墾の事業は未完成であるから、一応めどがつくまでは自分が責任を取る。この寄付に対し家族の中には賛成でないのもあるが、家族のためには別に手当してある。それには限度がある。その事を気にせず郷土後輩子弟の教育のために図りたい」というのである。

そこで私は「文部省の係官から藤田農牧場を義塾に寄付して頂くようにお頼みせよと言はれて居った所ですよ」と言ったら、大変な喜びの上機嫌で「義塾から申込まれぬ先手に自分から言い出してよかったなあ」と相好を崩して高笑した。そして言うのには義塾は年次予算で収入は授業料その他の収入二万円に対し、校費支出四万円を要し、その不足分二万円は米国教会からの寄贈を受けているそうだが、この農牧場にはすでに百万円を投じているから、二パーセントの収益が上るとせば教会からの寄付なしに永久に義塾が維持経営して行けることになるだろう。それを望むと。

藤田農牧場育英社寄付採用臨時理事会　昭和三年七月五日東奥義塾々長室に於て、臨時理事会を開き、義塾理事十一名と藤田農牧場主任明石桐一と会合し、主題の件につき笹森塾長より概括報告し、

明石氏より内容の詳細なる説明あり、審議の結果承認可決された。

証

藤田謙一はその所有に係る左記の農場及育英舎の資産全部を東奥義塾財団法人に左記の目的及条件によりて寄付し、東奥義塾財団法人はその目的条件を承認しその寄付を受く。

寄附資産目録

藤田農牧場及育英舎価格見積書

名　称　藤田農牧場

所在地　青森県中津軽郡岩木村

此総見積価格金九十八万五千五百十五円七十五銭也

内訳

土　地　八百三町二反七畝十二歩　見積額金六十七万五千百十七円五十銭也

内訳

水田　五十六町七反四畝十二歩

見積金額金十八万四千六百四円也　反当三百五十円の割

畑　百二十二町歩

同　金十八万三千円也　反当百五十円

宅地　三町五反歩

同　金二万六千二百五十円也　坪当二円五十銭
未開墾地　山林原野　六百二十五町三畝歩
同　金二十八万一千二百六十三円五十銭也　反当四十五円
建築物総坪数千五百五十坪四合五勺
同　金八万九千三百二十六円也
幹線道路　見積額金七万五千円
機械及器具　金九万七千二百八十三円
軌道　金三万円
備品什器　金八千九百九十七円
牛馬　牛四頭　耕馬十二頭
同　金九千七百九十一円五十銭
昭和二年十二月末日迄の総投資額八十三万三千二百四十九円八十銭也
名称　藤田育英舎
所在地　青森県弘前市上白銀町
此総見積額金六万二千四百三十円十銭也
内訳
建築物総坪数　百九十六坪

見積額金六万一千三百七十五円
備品什器　金千五十五円十銭
計　金　壱百四万七千九百四十五円八十五銭也
建築物移転費及農場改良費　金六万五千円也
総計　金壱百十一万二千九百四十五円也

目的

一、藤田育英舎の育英事業を東奥義塾財団法人に於て継承す
一、東奥義塾専門部設立の基礎となす

条件

一、昭和三年、同四年、同五年末に至る三ヶ年間右記農場の改良に要する費用は寄附者之を負担す
二、農場より得たる純収入は之を折半しその半額は之れを弘前市に於ける育英事業及義塾経営費に充て他の半額は東京に於ける育英事業に充つ
四、明石桐一を東奥義塾財団法人理事に加える手続をなし、之れを実現し、又農場現業員はそのまま継続す。但しその将来の継承者は東奥義塾財団に於て之れを為す
四、寄附の建物の一部の之を東奥義塾境内に移し、他の一部は農場に移し、その移転費は寄付者に於てその必要の際負担す

昭和三年四月七日

寄附者　藤田謙一

寄附受領者　東奥義塾財団法人

右代表理事常任理事　笹森順造

同　同　山鹿元次郎

同　同　タムリン

右同意す　東奥義塾財団法人理事

工藤儀助　外十名

右に関し寄附者藤田謙一に対し左の如き感謝決議を為して送った。

「今般貴下御所有に係る岩木山下広大の農牧場並びに在弘前育英舎の資産全部を挙げて当塾に寄附せられたるは之れ実に本塾将来の財政的基礎を強固ならしめ、育英事業を進展せしめ、且つ専門部設置の希望を促進し、以て之れに預る子弟をして永久その恩恵に浴せしむるを得るものにしてその徳や実に大なりと称すべし、仍て茲に本法人定期理事会は満場一致を以て深く感謝の意を表す」（『東奥義塾再興十年史』より）

爾後の助成　私はしばしば上京し丸ビル内に在る藤田事務所を訪れた。必ず多数の面会人が会見の順番を待って待合室に控えているその後に私も続いた。それが大概お昼になると、同じビルの九階の精養軒の食堂に案内され、昼食を取りながらの会議となる。藤田先輩はその日の出来事に対する卓見を披歴して談論風発止まるところを知らない。総て威勢のよいお話しである。私の言う事は細かく聞

かない。すべて義塾の財政強化の事と農牧場開発資金の助成を求める件であるので私の顔を見ただけでわかって居り、それを信頼してことごとく希望に応じてくれて、一度も拒否した事がない寛大さである。

火災善後策　昭和五年七月七日午後四時過ぎ、義塾二階教室より出火し、二階ほとんど全部を焼失し、階下も破損した。その応急対策として、藤田謙一先輩寄附に成る旧公会堂大広間を本校敷地内に移転して必要に備えた。その恒久策としてC・アイゲルハート師は校舎再建資金を募集のため渡米する事となり、不燃質鉄筋コンクリート三階建校舎を新築した。私も次いで募金のため渡米した。渡米に先立って藤田先輩に挨拶に赴くと、同情し思いがけなく餞別を下された。私は渡米してデンバー大学学友美術部出身の画伯渡辺寅次郎がニューヨークに居り、日本人画家として、日本画の線を表わす画法を洋画に取り入れ好評を博し、ニューヨーク、ウッドスタック画会の審査員に挙げられていたが、その後しばらく健康を害し、休養を続け、作品もなく、従って収入の道も絶え、生活難に陥り、神経衰弱となり、一時自殺を思い立っているとの噂を聞いたので、見舞金を激励文に添えて郵送した。後に渡辺画伯と私がニューヨークで会った時の画伯の話はこうである。二日程食事を取らず、病苦と空腹を抱え、自殺を思い立ち、その前に自らの郵函に来信を見に行ったところがその中に笹森からの手紙と為替とがあった。これを見てこおどりし、早速レストランに駆込み、思う存分食べたら、元気づいて死ぬ気にならなくなった。ゆっくり宿所に帰る森林の路を行くと、この路はこの日とても美しく目に映る。それを題材にして「森林の路」なる一幅の画を描いた。自分でも、生死の関頭を去来して

の力作であるので快心の作である。この名画を同画伯が私に贈ってくれた。私はこれを大事に日本に持帰って、そのいきさつを叙して藤田先輩に差上げたら喜んでお受け下さった。

農牧場の開発進行　藤田寄付者の厚意あるその後の助成により農牧場の開発が進み、学校側の諸方策と相俟って着々成果をあげたが、敗戦後農地解放令により、農場の小作人は地主となり、精農に励んで生産量も増加し、生活も安定するに至っている。又その後国策により、国家の施策による開墾適地は若干移譲されたが、大部分の残った山林原野は植林によって、義塾が収益を挙げている。

頌徳碑　農牧場山地より巨大な岩石を掘り出し、農牧場貫通県道入口恰好の衝点をトし藤田謙一翁頌徳碑を義塾が建立し、東京の遺族をお迎えし、義塾側、地元岩木町代表者多数参列して、盛大な除幕式を挙げ、祝賀感謝の催しをなし、藤田翁の偉徳を頌した。

4、藤田別邸と弘前市公会堂

(1)　藤田別邸落成祝賀園遊会

「三年有余の歳月と数十万円の巨額を投じて築成された藤田育英社並に同家別邸落成の祝賀園遊会は予報の如く昨七月二十七日午前十一時より同庭園において盛大に挙行された。

この日朝来諦め切れぬ年寄の胸中の如き天候なりしが、そよぐ青葉漸時雲間洩る陽光に彩られ来て恰も藤田家千載の栄を表徴するかの如く正午全く晴れた。

腕車に騎馬に続々詰め掛ける来賓は尾崎知事を始め長谷川、辻村、加藤、河野、成田、村本、淡谷、佐藤、斎藤の各県議、市側にては石郷岡弘前市長を始め各市会議員、軍隊側にては笹森弘連区司令官、明珍騎兵少佐、秋川八師団司令部付、柾川同、山下同獣医部付、蒲井弘憲隊長、大園同分隊長、太田原法務官、高屋青森、成家弘前各署長、田浦中郡長、小山内中郡議長以下各郡議、秋田弘高校長始め各県立学校長、田中弘区監督判事、大島税務署長、市内各弁護士、同医師、石田岩木山神社宮司、大村駅長、宮崎弘局長、船越弘小林区署長、高谷津銀頭取、各社記者、郡内各地重立、小作人、農牧社ら六百名。

近時稀にみるの大集会にして三々伍々庭内を縦覧せしが丘上より俯瞰すれば広庭中央に宴会場として大バラックの設立あり、往時太田道灌の訪れたる山奥の賤ヶ伏せ屋の趣きある各模擬店、邃園の若葉と映え合うて折柄音楽隊の吹奏する「ドナウ河の漣」、流れ無き滝路も忽ちにして天恵の花露滾々として流れ来たるを想わしめる。

邸家の壮麗と庭園草石陰陽配置の妙に魅惑されつつ逍遙しあるに午後零時半石郷岡市長の陪乗にて津軽義孝伯及び後室照子の方御着邸、直ちに西洋館に入られ暫時休憩中、振鈴と共に設けられある大バラック内において開宴、午後一時伯爵一行、藤田一家の臨場あり席場藤田氏起って徐に

『顧みるに去る明治二十二年、笈を負い、国を去って三十有三閲年、一昨年帰弘の節は種々市民諸彦の厚意に預かった。幸に今回育英社並に別邸を落成したれば先年御招待を受けたる返礼を兼ねていさゝか披露の綬を記すべく御招待せし所御繁用中斯く賑々しく来邸下された事は誠に欣賀に堪えぬ。

さて社会奉仕かたがた聊か故郷に尽すべく育英社の外彼の岩木山麓農牧場の開拓を試みているが、これは三百余年前旧藩公が染手されて後、四ヶ年に渉る凶作で公の旨意も達成されず爾来荒蕪地同様となりおる。その跡をついで不肖此の事業に着手し拙速を旨として着々進行せしめて居るが収益は凡て之を育英事業に投ずる筈である。願わくは大方の諸彦に於ても共営の意味にて今後とも御援助を仰ぎたい』と謙譲なる挨拶あり是に対し石郷岡市長は所在地の市長として来賓を代表して

藤田氏は二十有余年の昔、所謂赤手空拳而かも両親の許しを受けることなくして当地を出て、一たび官界の人となりしも数年にして実業界に打って出て刻苦精励、悪戦苦闘、以て今日の大を致せるの人。今日爰にこの宏壮なる大建築の落成を見たるは啻に氏の為の慶賀すべき事なるのみならず併せて市の美観を添うもの将来益々自重、地方及び邦家の為め御尽瘁あらんことを望む云々と謝辞があり、続いて伯爵様よりも御挨拶申しあぐべき処なれど疲労の為宜しくとの事なりと伝えて復席、此の前後に榊田、安田両氏の謡曲あり、弘城の校書総出にて酒間斡旋宴酣なる頃、尾崎知事の音頭の下に育英社並に藤田家の万歳を三唱、それより余興とあって四時過ぎまで続き当地方に於ける個人的催しとしては其の邸宅と共に全く未曽有の大園遊会であった。」と結んだ。（大正11年7月28日弘前新聞）

(2) 弘前市公会堂

「総坪数千三百四十坪

建　坪　本館一階　二三八・七七坪

二階　二八三・六九坪
三階　七九・七　坪
一号附属舎二五坪
二号　〃　即ち門衛は二二・三五坪の木筋コンクリートの純西洋館

内部の腰は練瓦、外部はすべてコンクリートで固め、実に此の壮大優麗なもので二階公衆席は十間の十五間、優に千人以上を収容しうるという。同公会堂は主として元藤田家馬場技師の設計になり、材料としても八分通りは需給を済了し、残るは僅に造作材の幾分のみで現在は大工其の他諸職人・人夫等凡そ八十名ひたすら工事を急ぎおり、近く諸職人も殖えて百二十人位にはなるとの事なれば遅くも九月上旬迄には棟上屋根茸等を終わる予定にて市役所へ引渡し済みとなるのは十一月末か十二月始めになろうとの由なるが材料の見積りの落ちもあり、工事費総額は或は予定額の十三万円を突破すべしと云うが、数多の富豪に先んじて弘前のためにこの寄附を敢てした藤田氏の尽郷の志も偉大なりと云うべく、何れ竣成の暁は緑葉薫る鷹揚園を相対峙して弘前の一美観たり。また幼孫を携えて杖引く老の人もあるべく弘前市民も以て足れりとすべきである。」（大正11・8・14　弘前新聞）

結局、公会堂は大正十二年八月十一日、落成式が行われ、弘前市に寄贈になった。

弘前市史（昭39発行）は次の如く記述している。

大正一二年八月一一日、藤田謙一の寄付にかかわる新公会堂の開堂式が挙行された。小野寺師団長、尾崎知事以下軍官民各界代表四〇〇余名が出席し、新公会堂の途出にふさわしい盛儀であった。旧公

会堂は蔵主町の旧時敏小学校校舎を利用して明治四一年に開設されていたが、弘前市の公会堂としてはいかにも貧弱であったので、郷土出身の実業家藤田謙一が新たに公会堂を寄付することになったのである。藤田謙一は東奥義塾に学び、後上京して苦学力行、官界から財界に投じ、当時日活社長はじめ関係会社三〇社におよび、財界一方の旗頭であった。

新公会堂の敷地としては上白銀町一～二番地（一、七〇七坪一合）がえらばれ、そこに本館（木造三階建五四二、二五坪）および付属建物三棟を建築した。工事は大正九年に着工され、一二年に竣工した。総経費（敷地、建物、装飾、什器等）は一五四、〇二八円八九銭である。そのうち市の負担が四万円（旧公会堂を藤田謙一へ譲渡し他に現金一万円を支出した）だから、藤田謙一の実際の寄付額は一一万四千余円であった。このことに関して、石郷岡市長は開堂式の挨拶の中で次のように述べている。

「寄付の動機は謙一氏の舎弟明石桐一氏が大正八年斡旋せるものである。総経費一五四、〇二八円八〇銭のうち、旧公会堂の藤田氏に提出したる見積額三万円、装飾費のうち現金一万円、藤田氏個人として一一、〇二八円八九銭を負担している。」（弘前新聞）。それにしても当時の市の予算が、五八万九千余円であったことを思えば、この寄付の巨額さがわかろう。

新公会堂は旧城濠端の県道に面し、ほとんど市の中央に位し、前面に弘前城、西は遙かに岩木の秀峰を仰ぎ、東南は一物の　ぎるものなく、全市を見渡すことも出来る絶好の位置にあった。建物および装飾、什器なども当時としては善美をつくし、市に一偉観を加えた。この公会堂はその後ながく政

治、文化、軍事上のあらゆる催しに利用され、市民にとって欠くべからざる集会の場となった。（終戦後は裁判所、市議会、市福祉事務所、中央公民館などに利用されてきたが、新庁舎着工のため昭和三十三年に解体された）

なお弘前商工会議所は、解体に先立つ昭和三十二年十二月二十四日付で藤森市長に弘前公会堂を物産館として残してほしいと陳情している。文面は「藤田氏が郷土に対する報恩感謝の念と郷土後輩に対する垂範の意味から寄附された弘前公会堂」はさらに昭和二十二年天皇の宿泊所ともなっており、史跡的価値も生じたので移築して商工会議所と併置したいとのべている。

（後日談）昭和六十二年七月二十三日の朝日新聞・青森版に四段記事で福士弘前市長・唐牛商工㈱社長が話しあう写真と弘前市の藤田別邸買収の記事が載っている。

「弘前市は二十二日、市の中心部にある「藤田別邸（敷地面積二万八千平方㍍）を七億九千万円で購入することにした。土地の所有者だった故唐牛敏世弘前相互銀行頭取の孫の唐牛孝氏(64)＝弘前市百石町　唐牛商工㈱社長＝が同日市を訪れ、福士市長との話し合いで市に譲り渡すことを決めた。買収は市土地開発公社が肩代りして取得、市が二年計画でこれを買い戻すことにしている。

藤田別邸は、日本商工会議所創設者で初代会頭を務めた貴族院議員の藤田謙一氏（弘前市出身）が大正八年に邸宅を構える際、東京から庭師を招いて弘前城前に大庭園を築いた。同庭園は東京の古河庭園、三井クラブ、五島美術館の庭園を模したものと伝えられ、南郡尾上町の盛美園と並んで津軽の

代表的庭園とされた。

藤田氏が亡くなった後に弘前相銀頭取の唐牛氏が譲りうけ、庭園内を更に整備して高地部分は岩木山を借景とした洋風庭園に、低地部分は池泉回遊式の純日本庭園に改修した。昭和三十年頃から「弘前相互銀行倶楽部」（のちに「みちのく銀行倶楽部」）として庭園は市民に開放され、散策やいこいの場となって楽しまれてきた。しかし、五十四年に唐牛氏が死亡してから庭園開放もなくなった。

閉鎖後は、せっかくの名園も荒れる一方だったため、市が買収を計面、関係者と折衝を進めていた。市の構想だと、買収後の活用方法は当面旧形に復元整備し、公園として市民に開放する方針。さらに将来計画として、江戸時代の農家の建物を配置したり、邸内の古い住宅を活用して、埋蔵物や民俗資料の展示も行いたいという。」

5、五十九銀行の救済

(1)

青森県内の金融機関は第一次世界大戦後の経済界の動揺をうけ、とくに昭和初頭の金融恐慌、世界大不況にまきこまれ大変動をなした。その変遷は回録的にみると次の通りである。

青森市では県が三分の一持株の特殊銀行の青森県農工銀行が大正十二年、日本勧業銀行へ合併、大正九年、西郡、北郡の地主たちが設立した鳴海銀行は昭和三年、五所川原銀行、立誠銀行と合併して

陸奥銀行となった。五所川原銀行は五所川原の豪商布嘉佐々木家や平山家が中心になっていた。立誠銀行は大鰐町苦木の地主・水木惣左衛門の創立。弘前市の野崎惣助が協力、のち西郡車力村の鳴海廉之助が中心になり、古川市三郎、佐藤源蔵らの津軽の大地主が引きついだ。東奥銀行は大正十一年、北郡板柳町の安田久五郎（酒造業）によって創立され、昭和二年盛岡の第九十銀行と合併した。この時、東奥銀行側に不良資産があったのを隠匿したとトラブルがあった。

弘前では前記の立誠銀行のほかに関銀行が大正十四年弘前銀行に合併した。これは関清六を中心とする同族銀行であり、大正期に入り経営順調ならず第二次弘前銀行に合併した。また弘前宮川銀行は大正九年、宮川久一郎とその一族によって創立、昭和四年資本金過少によって関係の深い津軽銀行に合併。弘前両益銀行は弘前市の松木彦右衛門が中心になり木造の市田利平らが参加した。大正十五年、板柳銀行に合併した。

八戸市では歴史をほこる階上銀行が昭和三年、泉山銀行、八戸商業銀行、五戸銀行と合併して八戸銀行を新立した。これは金融恐慌を契機とした政府の銀行合同政策にもとずいたものである。八戸銀行の統合も大蔵省の強引な政策によったもののため、役員間の不和もあり、常に緩慢な取り付け状態が続き、経済不況と相まって昭和五年十一月二十四日午前九時、ついに休業となった。この後、事態は紛糾して二年間動揺し昭和七年十一月二十日、やっと正常に復した。この八戸銀行の休業が県内の他の銀行に与えた影響は大きかった。

この他、藤崎銀行は昭和二年、弘前商業銀行へ合併、西郡の高谷銀行は昭和二年破産、木造両盛銀

行は昭和三年解散、上北銀行は昭和二年、第五十九銀行へ合併、野村銀行は昭和六年解散、下北銀行は昭和四年第五十九銀行へ合併した。

(2)

戦後恐慌、震災、金融恐慌、世界大恐慌と十年にわたる不況に加えて、昭和六年、大凶作が県下を襲い、県下経済界の困難、銀行の資金難が一層激しくなり、そこへ第五十九銀行青森支店の幹部行員二名の行金横領事件が明るみに出て世間に一大衝動を与えた。

横領金額は約一二〇万円、そのうち約一六万円は両名の財産で補塡したが銀行の損失は預金残高の五%に近かった。これが公表されるや預金の取付けが先の八戸銀行休業で被害をうけた南部方面を皮切りにしだいに全県下に及んだ。そしてついに弘前銀行が十一月二十四日休業、たちまち第五十九銀行も取付けをうけ翌日休業の羽目におちいった。大蔵大臣井上準之助へ第五十九銀行頭取宇野勇作が提出した「預金払戻停止報告書」によると預金残高は九月末は二千二百九二万五千八〇四円五七三厘だったが十一月二十四日には二千六一万六千七六四円八五〇厘で取付騒ぎで一挙に二百三十万九千三九円七二三厘減少した。

第五十九銀行の休業をきっかけとする県下の金融動乱は、年末をひかえていたことで一大事に立ち至るおそれがあった。かくて県下各界の代表は大挙して上京し、中央の融資を得るため猛運動を展開した。

また同年九月勃発した満州事変のため、弘前旅団が十一月二十八日満州に出征することになったが、

鈴木旅団長は郷土の災害および経済的混乱が士気に影響すること多大なりとし銀行救済問題について首相および軍部大臣に重大な進言を行なったといわれる。

県政、財界の第五十九銀行救済運動の緊迫した状況の記録は青森商工会議所委員の経過報告になまなましい。そしてここで前日本商工会議所会頭藤田謙一の存在が大きく浮かび上ってくる。

昭和四十三年刊行された「青森銀行史」にその記述をみてみよう。

「十一月二十八日当所議員総会に於て金融安定方に付き、上京各方面に陳情を為す事となり当所委員として横内会頭、田中副会頭、小坂常議員、下田議員、高瀬理事の五名は北山青森市長、村本、小田桐正副市会議長及弘前宮川会頭、本多理事外三名と同道、十二月一日午後一時三十分青森駅発、途中より八戸商工会中村会長外四名参加、翌二日午前七時上野駅着せり。二日午前十一時日本商工会議所訪問、郷会頭、渡辺理事に面会陳情、夫々援助要望せしに会頭は快諾し、向後出来る丈け尽力をなし、且つ大蔵大臣及日本銀行総裁に夫々日本商工会議所として懇談方を約せり。是より委員を二分し、一隊は民政党、一隊は政友会本部を訪問せり。

午後一時文部省工藤参与官を訪問。一時四十分より民政党本部に一同参集、俵前商相、山道幹事長に面会、午後二時三十分大蔵大臣官邸を訪問せるも、来客あり面会出来ず、午後三時商工省桜内商相に面談陳情、種々意見を拝聴、三時三十分内務大臣官邸安達内相に面談陳情せり、五時三十分再び大蔵大臣官邸訪問、井上蔵相に面談陳情、六時三十分に弘前、八戸の本部たる丸ノ内ホテルへ参集、協議の上五十九銀行重役宛左の通り打電せり。

『大蔵、内務、商工各大臣其他要路ニ対シ一同陳情ノ結果何レモ銀行当局ノ具体案ヲ希望セリ。県債ハ此際適切ナルモ休業期間ニ救済シ得ル方針ヲ決シ、材料携帯重役至急上京アリタシ。青森市長、八戸、青森、八戸商工会代表陳情委員一致ヲ以テ希望ス、急ギ返電ヲ待ツ』

午後九時頃、藤井代議士孔雀荘に来訪あり。同十時辞去せられ、此間横内会頭より千葉副会頭へ電話にて打電の要旨及今日の模様を通話せり。此夜十一時弘前宇野五十九銀行頭取より左の返電（丸ノ内宮川会頭宛）あり、翌三日午前八時二十分右電報の趣を北山市長に通知せり『見タ　御尽力ヲ感謝ス　明晩十一時タツ　皆サンニヨロシク』

三日午前九時弘前、青森商工会議所、八戸商工会代表陳情委員の名を以て青森県知事宛左の電報を発せり。

『大蔵、内務、商工各大臣其他要路ニ陳情セリ、何レモ御同情アリ、更ニ閣下ノ御尽力ヲ乞フ』

午前十一時農林大臣官邸を訪問、親しく町田農相に陳情、同十一時半文部省にて田中文相に陳情、尽力を依頼せり。午後二時大蔵省に大久保銀行局長を訪問、銀行局長の立場より今回の問題につき懇々意見を承り、二時半辞去、午後二時半より日商を訪問、渡辺理事に面談、前日来の運動経過を報告し、郷会頭に之が伝達と併せて将来の御援助を乞いたるに渡辺理事は快く承諾せり、午後五時より日比谷陶々亭に於て工藤代議士、小野謙一両氏の労に報いる為め両氏を主賓とし、一同晩餐を共にせり。尚本日二千万円の県起債の案確定記載の東奥日報号外を会議所より送りよこせり。

四日午後二時半北山市長初め田中青商副会頭、本多弘商理事、高瀬青商理事外三名、工藤十三雄、

藤井達也各代議士等五十九銀行重役を上野駅に出迎う。

宇野頭取初め渡辺佐助、宮川久一郎、西田亮氏来京。午後四時より東京商工会議所に於て五十九銀行重役と陳情委員一同併せて工藤鉄男、工藤十三雄、藤井達也、宮館弘前市長、工藤市会議長、小野謙一、弘前商業銀行頭取菊池長之、河野栄蔵、山内亮ノ諸氏司会の上北山市長、宮川弘商会頭、横内青商会頭、工藤両代議士、藤井代議士等より各省大臣並に大久保銀行局長に面会陳情の経過を報告し、重役諸公の一大決意を迫りたるに対し、宇野頭取謝辞を述べ、重役の決意を仄めかし、尚将来の援助を頼む旨の希望を述ぶる処あり、次で工藤代議士の発議により陳情委員中より更に委員を詮衡し、五十九銀行側と折衝しては如何と謀りたるに、五十九側より青森、弘前、八戸三市長、青森、弘前会頭、八戸商工会長を委員に詮衡されたしとの希望を述べ、異議なく可決。午後五時より別室に於て右委員と重役にて協議を開始し午後九時終了。

此の間藤田前日商会頭来訪あり。右協議に参加せらる。

七日、午前十時万世ホテルに行きたるも容易に会議に入らず、此間安田県商工主事より、中小商工業者低利資金借入につき応援運動方につき、相談あり、弘前商工会議所と相談の結果、此際至急なる運動方につき極力応援の事に決し、直ちに万世ホテルを辞し、弘前と相談の上、藤田謙一氏を事務所に訪問し、従来の好意を謝し、尚将来の援助を依頼し、夫れより藤田氏同道、東京商工会議所を訪問し、渡辺理事に面会し、郷会頭及理事の寄せられたる敬意を謝し、併せて将来の援助方を懇願したり。尚謝礼の為め林檎二箱寄贈することに弘前と申合せ同所宛発送方県出張所へ注文せり。」（下略）

かくて五十九銀行は救済され、十二月十六日開店された。

「弘前商工会議所七十年史」は第五十九銀行休業救済に藤田が活躍したことを次のように評価している。

この救済のために「当所からは、会頭宮川忠助、近藤東助、久保喜一郎、福永忠助、石郷友次郎、長谷川与助、工藤豊吉、雨森良太、本多二郎等が出むいている。当所議員をはじめ青森商議所議員、県議などの代表委員の中央での協議会に、藤田謙一はすすんで参加、意見をのべ、或は日商に委員を同道し、日商においてもこの救済に側面からの協力方を強く訴えている。藤田謙一の後任の会頭の郷誠之助は、さきにのべた東京毛織株式会社に企業合同した東京製絨株式会社社長であったし、また自分の後任にその就任方を懇望したといわれる古くからの昵懇の人であり、また専務理事の渡辺銕蔵は自分の懇請によって就任した人物でもあることから、藤田謙一の日商への力添え方の働きかけは、救済委員等に大いに励ましになったという。第五十九銀行本店所在地の商工会議所として、藤田謙一のこのときの労をながく伝えおくべきところの一つであろう。」と讃えている。

6、郷土へのメッセージ

藤田は昭和十五年、東奥日報社発行の「月刊東奥」九月号に次の一文を寄せて郷里への挨拶とした。

「此度我が敬愛する東奥日報社より『郷土への便り』を求められましたので、私には別段珍らしい

便りも御座いませんが、一言記させて頂きます。

私は今より五十年前（明治二十四年）齢十八歳にして郷里たる弘前を出でて東京に上り学業に勉めましたが、その間幾多の波瀾及び試練を経て今日に至ったのであります。私は国を出ましてから三十年間は、絶えて郷門を潜りませんでした。之は一つに志成らずんば郷里に帰らずと心に固く誓っていたためであります。

その後現在迄の二十ヶ年は職務の余暇を見計らい、時々郷里に帰りまして祖先の墳墓に詣で、又郷土の諸君と語り合い、多少の御手伝いをすることを無上の楽しみに致しております。

私は誰にも劣らぬ強い郷土愛を有しているつもりです。私は今日迄幾多の艱難に遭遇しましたが、その都度、私の郷土愛は私に勇気と忍耐を与えてくれました。私は生命のあらん限り否霊魂の続く限り、郷土を愛し、郷土を思う事によりまして、自分に与えられた仕事に渾身の力を注ぎ、以てあらゆる困難を排し、天職を全うしたいと思います。この祖先を尊び、郷土を愛する心は、愛国心の源泉であります。その身は地球上何れの地に在りましても、又何事を為しておりましても、何人たりとも寸時も之を忘れてはならぬもっとも重要な事柄であります。

前述の如く郷土愛は愛国心の源泉でありますが、愛国心は又報国心の母体です。御承知のように今や我が日本は重大時局にあり、国家の興廃はかかって我々国民の上にあるのです。この秋にあたり、諸君は益々御健康に御留意あり、以て銃後の任務を全うさるるよう切望してやみません。

私も今年六十八歳になりましたが、お蔭ですこぶる健康に恵まれ、心身共に若者と何ら変りなくこ

の非常時局に精励しております。郷土の諸君！たとえ働く所を異にしていましても至誠は一つです。お互に一致協力して邦家の為、さらに一段の奮闘を致そうではありませんか。」

藤田の郷土愛は育英事業であれ、多くの寄附行為であれ並はずれたものである。県内に彼に勝てるものはいない。しかし残念なことに多くの県民は彼の金力に目を見張ったがその経済活動を正当に評価する余裕も知識もなかった。故郷に受け入れられなかった藤田にとってはもどかしい限りだったろう。

（落ち穂）藤田謙一が故郷に思いを寄せた行為は拾いあげるとまだまだある。

たとえば「弘前図書館六十年の歩み」の中に「昭和三年四月、青森県立図書館設立され九月一日より一般閲覧を行なう。書籍は旧市立図書館から引継ぎされた二八〇〇冊の外、藤田謙一寄贈の古漢書六、五〇〇冊などもあり第一期の新刊書も三〇〇冊仕入れている。」

また昭和二年五月二十九日の弘前大火では早速に五百円を市役所に寄付している。